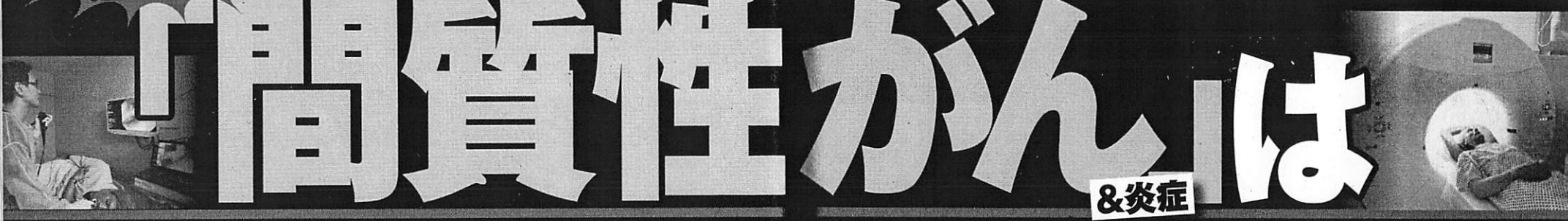


50代以上に「臓器のスキマ」で発生・進行する怖い病の正体
急増中!



患者も医者も気づかない

肺炎も腎炎も膀胱炎も！早期発見の方法は？

がんは、臓器に「がん細胞」ができて発症するケースが一般的だが、実は、臓器のスキマで秘かに進行することもある。その場合は患者も医者も気づきにくいから厄介だ。高齢者こそ注意すべき病をレポートする。

悪性腫瘍が潜伏

3月26日に亡くなったシヨケンこと萩原健一さん(享年68)の死因は、「消化管間質腫瘍」(GIST)という聞き慣れない病名だった。2011年に発症後、病名を公表することなく、8年近くに及ぶ極秘闘病を続けていた。

GISTとは、胃や小腸、大腸などの消化管(肝臓・膵臓は含まない)の「間質」という組織にできるがんの一種だ。

発症率は10万人に1〜2人と少ないため、「稀少がん」と呼ばれる。発症部位は胃が約70%、小腸が約20%、大腸が5%程度で、日本では年間1000〜2000人の罹患者がいるという。高齢者ほど罹患しやすい。60〜70代の発症者が多く

い病気だ。病名に冠される「間質」とは何か。

NPO法人・稀少腫瘍研究会理事で、兵庫医科大学主任教授の廣田誠一医師(病理学)が解説する。

「間質とは、体内のあらゆる器官や臓器の隙間を埋めている組織のことで、それぞれの器官や臓器を支える役割を担っています。間質のがんは、消化管で起こるGISTが最も多い。一般的に、胃がんと大腸がんなどの消化器系がんは、臓器の表面を覆う上皮(粘膜)細胞ががん化することで発症しますが、GISTは上皮ではなく、その下層にあり、消化管を動かす働きを持つ「カハール介在細胞」という特殊な間質細胞

が悪性腫瘍(内腫)に変化して起こります(50頁掲載のイラストを参照)

GISTは自覚症状に乏しく、患者が異変に気づきにくい。

「胃にできたGISTの場合、腫瘍がかなり大きくなって胃の上皮にまで潰瘍ができ、出血が起きるまで患

者が異変に気づかないことが多い。

小腸にできた場合にも出血や貧血などの異常が生じますが、それが小腸に由来する症状とはわかりにくい。中には、腸閉塞が起って重篤化するまで医師にからないケースもある」(同前)

胃カメラに映らない

医師にとっても、上皮にできるがんに比べ、間質の壁の中にできる間質性がんでは、同じ検査を行っても診断が難しい。

「どちらも胃カメラ(内視鏡)や造影検査が発見の手段となります。ただし、通常の胃がんでがん細胞ができた上皮(粘膜)の表面が爛れるという異常が見られるのに対し、GISTは粘膜の表面が綺麗のまま進行する。そのため腫瘍がかなり大きくなってからで

いと見逃されるケースがあります。腫瘍が2cm以内のうちに見つかれば早期発見といえますが、10cm以上になってしまうと、再発・転移のリスクが非常に高くなり、寛解が難しくなってしまうのです」(同前)

自覚症状がないまま、判明した時には再発・転移リスクが高い「悪性腫瘍」が8年闘病の末、シヨケンも命を落としました



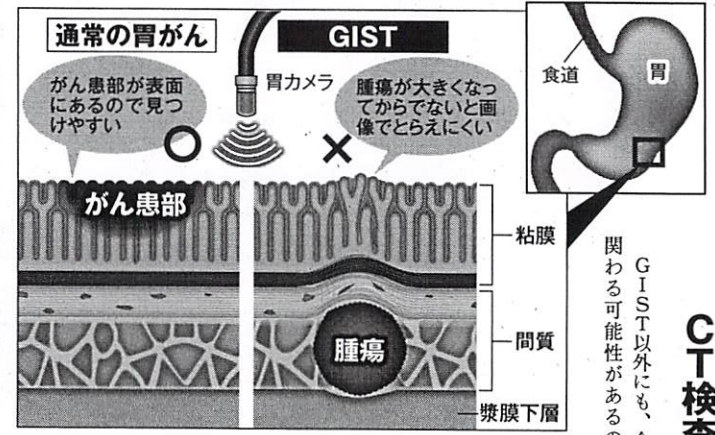
黒田日銀はなぜ「暴走」を繰り返すのか？

日本銀行「失敗の本質」

原真人

病変が発見された場合、外科手術が第一選択肢となるが、転移が認められる場合には、分子標的薬などの抗がん剤投与も必要になる。GISTの原因を、「カハール介在細胞」の遺伝子の突然異変であると突き止

GIST (消化管間質腫瘍) はなぜ発見が遅れるのか



めたのは、前出・廣田医師だった。近年になってこの遺伝子を対象にした分子標的薬が開発され、再発・転移があった場合でも、「患者の5年生存率は飛躍的に向上している」(廣田医師)

CT検査を受けたのに

GIST以外にも、命に関わる可能性があるのが

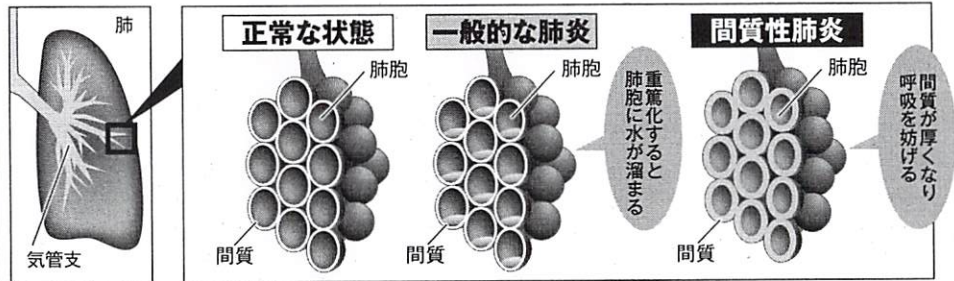
「間質性肺炎」だ。神奈川県立循環器呼吸器病センターが設立した、日本初の「間質性肺炎センター」室長の小倉高志医師(呼吸器内科)が解説する。「肺の間質とは、吸った空気が酸素を取り込む『肺胞』という組織の『外壁』にあたり、二酸化炭素を放出する役割を担っています。間質が炎症を起こし、線維化する(厚く硬くなる)病気が間質性肺炎です。間質が厚くなることで、酸素と二酸化炭素の交換を妨げ、呼吸困難を生じます」。一方で、一般的な肺炎は、細菌が肺胞に侵入して炎症を起こすことで生じる。さらに重篤化すると、肺胞の中に水が溜まることで呼吸

困難に至るケースもあるが、間質性肺炎とは発症のメカニズムが異なる(51頁掲載のイラストを参照)。間質性肺炎の国内患者数は1万2000人以上といわれ、「50代から増え始め、70代でピークを迎える」(同前)という。52歳でこの世を去った美空ひばりさんも間質性肺炎を患っていた。「初期症状としては、坂道や階段での息切れ、コホコホといった空咳があります。加齢や単なる風邪と見分けが付きにくく、喫煙者なら『タバコのせい』と思いがちです」(同前)。間質性肺炎は、薬の副作用や自己免疫疾患(関節リウマチなど)などに起因するものがあるが、中でも危険なのが原因不明の「特発性間質性肺炎」だ。「その多数を占める『特発性肺線維症(IPF)』になると、急激に呼吸機能が低下する『急性増悪』が起こることがあります。その死亡率は40〜50%で、間質性肺炎全体の死因の4割を占



「咳き込み」「頻尿」の原因は加齢とは限らない

一般的な肺炎と間質性肺炎の違い



肺胞の周りを囲む壁の部分が「間質」。この部分が厚く、硬くなった状態が間質性肺炎。

と、マジックテープをはがす時のような「バリバリ」という音が聞こえます。呼吸器学会が医師に向けて啓発しています。それでもまだ周知が徹底されているとは言えず、風邪や肺炎と間違われることもあり。しかし、線維化のスピードには個人差があ

抗生物質が効かない

加齢とともに増加する「前立腺肥大」や「過活動膀胱」(膀胱炎)などと間違いやすいのが「間質性膀胱炎」だ。上田クリニック院長の上田朋宏医師(泌尿器科)が解説す

「間質性膀胱炎になると1日に20〜30回もトイレに行く頻尿が起こったり、尿道や膀胱に針を刺すような激痛が走る。

り、「突発性肺線維症」を見逃している。一般的な肺炎と思ってしまううちに急性増悪に至るほど深刻化してしまふ可能性もある(同前)。最近では線維化の進行を遅らせる治療薬が出ており、早期発見できれば予後の改善が見込めるという。50代を過ぎたら、咳き込みや息切れを一風邪や加齢のせい」と甘く見てはいけ

間質性膀胱炎は進行すると間質が線維化し、膀胱が萎縮してしまふ。「生理食塩水を注入して萎縮した膀胱を拡張させる手術しか保健適用の治療法はありません。新薬の開発も進んでいます。一般の泌尿器科では見逃されやすいのが現状です」。尿をろ過する働きを持つ腎臓にも「間質性腎炎」がある。

一般的な腎炎が、糸球体(血液をろ過するフィルター)の役割を担う組織に炎症が起きて発症するのに対し、間質性腎炎は糸球体以外(間質)に炎症が起きる。自覚症状がないまま進行することが多く、ほとんどは健康診断などで腎機能の低下を指摘されて初めて発覚する。放置すると慢性腎不全を引き起こし、人工透析を余儀なくされることもある。



上段左から高橋医師、小倉医師 下段左から上田医師、廣田医師

福井大学医学部附属病院の高橋直生医師(腎臓内科)が解説する。「これまでは、抗菌薬や非ステロイド系消炎鎮痛薬などの副作用で起る。薬剤性の疾患と思われていたが、近年では、薬剤性以外にも原因不明の間質性腎炎もあることがわかってきました。治療はステロイド投与が中心となり、いずれにしても早期発見が重要です」。臓器のスキマに潜伏する病は研究も道半ばで、見つけ出すのも治療も一筋縄ではないものが多い。だからこそ注意を怠らないことが肝要だ。

週刊ポスト 次号(4月26日号)は4月15日(月)発売です 一部地域で発売日